

候べきといひたるに、諸人おとがひをはなちてわらひたるに、一人の侍ありて、かはつるみはいくつばかりにてさぶらひしぞと問たるに、この僧くびをひねりて、きと夜べもしてさぶらひきといふに、大かたどよみあへり、そのまぎれには、やうにげにけりとぞ。

〔義經記^七〕へいせんじ御見物の事

辨慶申けるは、略中ふえにおゐては日本一ぞかし、たゞしえさい一候、此少い人は、はぐろにおはしまし候時も、あけくれふえにのみ心をいれて、かくもんの御心もそらくに御わたり候し程に、ごぞの八月はぐろを出し時、師の御坊今度の道中、上下かうのあひだ、ふえをふかじといふちかひをなし給へとて、ごんげんの御前にて、かねをうたせ奉りて候へば、少人の笛をば御めん候へかし。

〔明德記^中〕十二月廿九日、八幡ニテ寄合テ、軍ノ内談有ケル中ニ、中務大輔若黨六人別シテ契約ノ事アリ、山口五郎、森下六郎、旗津、志賀野、小嶋新三郎、家喜九郎、是六人成ベシ、中ニモ家喜ガ申シケルハ、此年月久ク在京シテ、天下ニ自然ノ事モアラバ、御所様ノ御旗ノ下ニテコソ、御大事ニモ逢セ給ベキニ、中務加様ニ成リ給ニ依テ、我等マデ昨日今日マデ栖押シ都ヘ責上ル事、不定ノ浮世ト云ナガラ、有ヲ有トモ思フマジキハ、弓矢取身ニテ侍ル也、去バ勝テモ負テモ、夢ノ世ニツレナク残り留テ、イツシカ逆徒ノ名ヲ取テ人ニ見エンモ面目無シ、今度ノ軍ニ討死シテ、勇士ノ數ニ入ズトモ、浮名ヲナリ共世ノ人ニ知レバヤト思ハイカニト申ケレバ、殘四五人モ諸共ニ誰モサコソハ覺エタル、一河ノ流レヲ汲ムダニモ多生廣劫ノ縁ト申ゾカシ、況ヤ同傍輩ト云ナガラ、互ニ他事ナク馴ナジミテ、アダシ命モカリノ世ノ草葉ニ置ル末ノ露、本ノシヅクト成行ハ、跡ニ殘リテ誰カソモ、獨リ思ヲ菅筵、敷忍ベキ名殘カヤ、此六人ノ其中ニ、一人ナリトモ打死セバ、殘五人皆共ニ枕ヲ並テ、後ノ世マデモ傍輩ノ約ヲ忘レジト、深く契テ八幡宮ノ鰐口ヲ鳴シテ、神水ヲ飲